

スモン患者におけるポリファーマシーの検討

軸丸 美香 (大分大学神経内科)
上杉 聡平 (大分大学神経内科)
角 華織 (大分大学神経内科)
中道 淳仁 (大分大学神経内科)
佐藤 龍一 (大分大学神経内科)
佐々木雄基 (大分大学神経内科)
堀 大滋 (大分大学神経内科)
石橋 正人 (大分大学神経内科)
藪内 健一 (大分大学神経内科)
麻生 泰弘 (大分大学神経内科)
木村 成志 (大分大学神経内科)
松原 悦朗 (大分大学神経内科)

研究要旨

スモン患者におけるポリファーマシーの検討を行った。対象は大分県でスモン患者登録をしている患者 12 名のうち 7 名で、スモン検診時にお薬手帳による内服薬剤の確認を行った。治療疾患については、スモン検診時に確認した。検診希望者の平均年齢 83 歳 (70 歳代 2 名、80 歳代 4 名、90 歳代 1 名) で、女性 4 名、男性 3 名であった。定期的な薬剤内服を行っているものは、6 名で、治療疾患は平均 2.8 病であり、内服平均は 9.5 剤であった。最も処方が多かったものは、「消化性潰瘍剤・制酸剤・健胃消化剤」で 6 名中 5 名 (83%) であった。二番目は、「血圧降下薬」および「催眠鎮静剤」の各 4 名 (67%) であった。三番目は「鎮吐剤」および「緩下剤」の各 3 名 (50%) であった。80 歳以上の女性 3 名が 12 錠の内服を行っていた。解熱鎮痛消炎剤を内服している 2 名は、いずれも催眠鎮静剤、鎮吐剤および緩下剤の内服を行っていた。高齢女性で多剤内服が多く、鎮痛剤、催眠鎮静剤、鎮吐剤、緩下剤の併用がみられた。

A. 研究目的

平成 29 年の厚生労働省による社会医療診療行為別統計の概要によると、院外処方では、75 歳以上の 40 % 以上が 5 剤以上の処方をされている (参考文献 1)。Kojima らの報告によると、多剤服用は 6 種類以上で有害事象が出現しやすく、本邦におけるポリファーマシーの準拠基準となっている (参考文献 2)。

スモン患者は平均年齢 80.5 歳 (平成 29 年度 ; 参考文献 3) と 1970 年以降の新規患者発生消失から 48 年

を経て、高齢化が顕著である。高齢者は、加齢に伴う生理的な変化によって薬物動態や薬物反応性が一般人とは異なることや複数の併存疾患をそれぞれ治療するために、投与された薬剤同士で薬物相互作用が起こりやすく、薬物有害事象が問題となりやすい。そのため、大分県におけるスモン患者を対象に、ポリファーマシーに関する検討を行った。

表1 検診者の疾患背景

	93歳	89歳	88歳	83歳	82歳	74歳	73歳	合計 (人)
消化器疾患	○			○		○		2
高血圧	○	○		○	○		○	5
不眠	○	○				○		3
便秘		○				○		2
関節痛	○	○						2
脳血管障害							○	1
脳血管疾患				○				1
その他			○		○	○	○	4
合計	3	4	1	3	2	4	3	2.8症状

表2 検診者の投薬内容

処方された薬剤	93歳	89歳	88歳	83歳	82歳	74歳	73歳	合計 (人)
鎮痛剤・解熱剤・鎮静剤・催眠剤・健胃消化剤	2	1	1	2	2	0	0	8
鎮痛剤	2	1	0	0	2	0	1	6
解熱剤	2	1	0	1	2	0	0	6
鎮静剤	1	1	0	1	0	0	0	3
催眠剤	1	1	1	0	0	0	0	3
解熱剤	1	1	0	0	0	0	0	2
鎮痛剤・解熱剤	0	1	0	0	0	0	1	2
鎮痛剤・解熱剤	1	0	0	1	0	0	0	2
鎮痛剤・解熱剤	0	0	2	0	0	0	1	3
その他	2	4	4	3	6	0	2	21
合計	12	12	8	8	12	0	5	

B. 研究方法

大分県在住で本年度のスモン検診を希望した7名の患者を対象に、スモン検診時に、お薬手帳による投薬内容の確認および治療内容の確認を行った。薬剤分類は、厚生労働省の提供する診療報酬情報提供サービスのうち、薬剤分類情報閲覧システムに従って行った。治療疾患については、スモン検診時に確認した。

また、この検診に関しては、大分大学 IRB の承認を得て、文書でのインフォームドコンセントを取得した上で検査を行った。

C. 研究結果

平成30年度の大分県におけるスモン健康管理手帳受給者登録は12名であった。全員に往復はがきによる検診希望(来院、在宅)の有無を尋ねたところ、返信があったのは、8名で、検診を希望したものは2名、在宅検診を希望したものは5名、検診を希望しなかったものは1名であった。

検診希望者の平均年齢83歳(70歳代2名、80歳代4名、90歳代1名)で、女性4名、男性3名であった。定期的な薬剤内服を行っているものは、6名で、治療疾患は平均2.7病であった(表1)。治療中の疾患としては、高血圧(71%)、不眠(43%)が多かった。

内服数の平均は9.5剤(最小5剤、最多で12剤)であった(表2)。最も処方が多かったものは、「消化性潰瘍剤・制酸剤・健胃消化剤」で6名中5名(83%)であった。二番目は、「血圧降下薬」および「催眠鎮静剤」の各4名(67%)であった。三番目は「鎮吐剤」および「緩下剤」の各3名(50%)であった。80歳以上の女性3名が12錠の内服を行っていた。解熱鎮痛消炎剤を内服している2名は、いずれも催眠鎮静剤、鎮吐剤および緩下剤の内服を行っていた。

D, E. 考察および結論

今回参加した7名のスモン患者においては、定期内服を行っている6名の平均薬剤数は9.5剤であり、副作用が多いと報告されている6剤以上の内服であり、高齢者の多いスモン患者においてもポリファーマシーの傾向が認められた。傾向として、高齢女性で多剤内服が多く、鎮痛剤、催眠鎮静剤、鎮吐剤、緩下剤の併用がみられた。

G. 研究発表

1. 論文発表：なし
2. 学会発表：なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 文献

- 1) 平成29年 社会医療診療行為別統計の概要 厚生労働省 HP
- 2) T Kojima et al, High risk of adverse drug reactions in elderly patients taking six or more drugs; Analysis of inpatient database, Geriatrics Gerontology International, 12 (3), 761-762, 2012.
- 3) スモンに関する調査研究 平成29年度総括・分担研究報告書